

P1-046

医療的ケアを必要とする児が在籍する特別支援学校における保健師実習の意義（第2報）—学校看護師の意義の認識理由—

廣金 和枝¹⁾、三森 寧子²⁾畿央大学¹⁾、
千葉大学²⁾

【目的】

保健師基礎教育では学校保健実習の実施が推奨されており、医療的ケアを必要とする児が在籍する特別支援学校（以下、医ケア児在籍校）でも実習が行われている。本研究は、医ケア児在籍校で児の保健管理を行い、学生の実習指導を担うこともある学校看護師の保健師基礎教育における教育意義および特別支援学校における実習意義の認識とその理由を明らかにすることを目的とする。

【方法】

2018年10月～11月に、学校看護師が配置されている医ケア児在籍校108校に質問紙を送付して学校看護師に回答を求め、回答のあった98人のうち、有効回答69人を分析対象とした。1)「学校と連携・協働する保健師育成の教育を実施する意義はあると思いますか？」（以下、教育意義）および2)「学校と連携・協働する保健師育成のための特別支援学校を場とした実習を実施する意義はあると思いますか？」（以下、実習意義）について、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5段階評価で回答を求め、「非常にそう思う」「そう思う」と回答したものを高認識群、「全くそう思わない」「そう思わない」と回答したものを低認識群とし、回答傾向を質的に分析した。

【結果】

教育意義は、高認識群34人(49.2%)、低認識群8人(11.6%)であり、その理由として、高認識群では、＜子どものQOL向上のための多職種連携の理解＞、＜保健師の支援対象となる学齢期の子どもと学校の理解＞、＜地域における連携のコーディネートを担う保健師の役割理解＞が挙げられた。実習意義は、高認識群27人(39.1%)、低認識群17人(24.6%)であり、その理由として、高認識群では、＜地域における学校との連携・協働のしくみの理解＞、＜学校現場や保健師の支援対象である学齢期の子どもの理解＞、＜地域で生活する障害児・者の現状と支援の理解＞が挙げられた。教育意義および実習意義の低認識群は、ともに「保健師とかかわったことがない」「現場に入ってからでよい」が理由の多くを占めていた。

【考察】

教育意義や実習意義の高認識群は、保健師の果たす役割への期待や知ってほしいという思いがその理由である傾向があった。一方、低認識群は、現場に入ってからでよいという考えや保健師の役割がわからないことが理由である傾向があった。

P1-047

新生児科外来における摂食指導患児の統計的検討

大岡 貴史¹⁾、高野 梨沙²⁾明海大学 歯学部 機能保存回復学講座 摂食嚥下リハビリテーション学分野¹⁾、
明海大学 歯学部 社会健康科学講座 口腔衛生学分野²⁾

【目的】

小児期には様々な原因による成長発育の問題がみられ、その中には摂食機能や栄養確保の問題によって離乳の遅れ、体重増加不良、呼吸器疾患などを生じることもある。一方で、摂食機能療法や栄養指導などによってそれらの症状が改善し、経口摂取への移行がなされることもある。本研究では、離乳早期からの摂食指導方法や支援内容の確立を目的として、乳幼児の摂食機能やその問題点の推移について実態調査を行った。

【方法】

対象は、2013年から19年の期間に某医療センター新生児科外来に摂食指導を目的として紹介された児のうち、初診時年齢が2歳未満の児262名（男児150名、女児112名）である。単回の摂食指導で終了した者や院外からの紹介であった場合は対象から除外した。対象児の診療録および摂食指導記録から、摂食指導の開始時と最終診察時の内容を調査項目とした。調査項目は、紹介目的や主訴、主な診断名、主な栄養摂取方法、摂食機能の発達段階、摂食指導内容などとし、これらを抜粋し集計した。研究実施に際しては本学倫理委員会の承認を得た。

【結果】

対象児の初診時年齢は12～18か月の児が約40%と最も多く、次いで19～23か月の児が多かった。診断名では運動発達遅滞が66%、ダウン症候群が28%、言語発達遅滞が18%と上位を占めた。また、出生時体重は約60%が2500g未満であり、極超低出生体重児は全体の約25%であった。初診時に経口摂取を行っていない児は8%おり、17%の児が経管栄養を使用していた。摂食機能の発達段階は、嚥下機能獲得不全が約半数を占めており、経口摂取準備不全の児も約30%認められた。最も多かった訴えは「離乳食の進め方」であり、半数以上を占めた。次いで、「経口摂取を開始したい」「嘔吐が多い」「嗜好が限られている」「むせが多い」「丸のみが多い」などの意見が多く、それぞれ10～20%認められた。

【考察】

小児期、特に2歳までの低年齢児においても様々な摂食機能上または栄養摂取に関する問題点が認められた。多くは基礎疾患による機能発達の問題であると考えられたが、明確な診断がなされていない児もいると推察される。多くの児は粗大運動発達の遅れも認められ、摂食機能の支援や離乳を進めるにあたっては全身発達の問題も把握したうえでの介入が必要であると考えられた。